

くるわ  
(1) 曲輪

山上から山麓までの尾根筋に多数の曲輪（屋敷地）は、大型の曲輪を中心いくつかのグループとしてまとめ、曲輪群が集まってできた大規模城郭といえます。本丸を中心とした階層的・求心的な構造であったというよりは、それぞれの曲輪群が半ば独立した分立的な構造といえます。畠山氏をはじめ、温井氏、遊佐氏、<sup>ぬくい</sup>長<sup>ゆさ</sup>氏、<sup>ちょう</sup>三宅氏などの重臣もそれぞれ屋敷を構え、生活や政治の基盤が山城内にあったことがうかがえます。

(2) 石垣

石垣は自然石を特に加工することなく積み上げる野面積みで築かれ、用いられる石材は、山麓にかけての谷筋の沢からおもに運ばれたとみられます。

石垣の高さが2mを超える、城内では規模が大きい石垣は、本丸から二の丸にかけての斜面で見られ、段状に石垣が築造されている箇所（本丸北側、桜馬場北側・北西側・南側、温井屋敷西側など）もこれと重なります。





### (3) 城下

城下は、山麓の標高約 95～45mの緩傾斜地に形成されています。現在の古城町と古屋敷町付近一帯にあたり、「蔵屋敷」、「高屋敷」、「大工町」、「鍛冶畑」などの往時の状況を示すとみられる地名や伝承が残り、武家（能登畠山氏の家臣）屋敷や職人の居住域などがあったようです。

そうがま

### (4) 惣構え

古城町と古屋敷町の町境には、東西に延びる高さ 2～4mの垂直な段差があり、部分的に土塁が確認でき、城の外郭の防衛線の「惣構え」とみられます。発掘調査では、底幅 3m以上の箱堀も確認されました。山上の城郭改修に連動して、城下には堀、土塁、切岸による「惣構え」が構築され、城下町が大規模に再編されているようです。

城下の状況は大きく2つの時期に分けられます。第1期は、16世紀初頭から後半で、正方形の街区を基本として城下の形成が行われていたと考えられます。第2期は、16世紀後半から末で、総構をめぐらせた城下を形成し、内と外を区別しています。惣構えの内側（南側）は、「城戸の内」で屋敷地、外側（北側）は「城戸の外」で商工業者の居住する町屋域とみられ、鍛冶、鋳物、金工、土師器皿づくりなど職人の居住が考えられます。



とじょうろ  
(5) 登城路

七尾城へと至る道はいくつかあり、現在、おもに散策できるのは大手道とよばれる旧道で、城下、古屋敷の「門の高」から古城の「高屋敷」を通り、蔵屋敷の西側から山道となり本丸へと至ります。門の高の南側の発掘調査では、両側に石組みの側溝を備え、路面に小砂利が敷き詰められた（砂利舗装）幅約3mの大手道と、道に面し石垣で区画された屋敷地も確認されました。

えつとがさんしゅうし こきょこう とだかげちか  
『越登賀三州志 故墟考』（富田景周著、江戸時代の越中、能登、加賀の地理・歴史書）には、「天正五年閏七月に上杉謙信が七尾を攻めるとき、  
ちようつなつら からめて ぬくいかけたか  
大手赤坂口は長綱連、搦手大石谷は温井景隆、水（木）落口は  
ゆさつくみつ  
遊佐続光とあり、」と家臣が守備した位置が記されています。これがどこ

か推測すると、次のような登城路が考えられます。

○ 大石谷口（西側からの道）…大谷川中流から九尺石へと至る道とみられます。

○ 木落口（北側からの道）…木落川の東側を通り、<sup>えぼし</sup>烏帽子谷付近へと至る道とみられますが、検討を要します。

そのほかに、次の登城路などがあるとみられます。

○ 大門道（北東側からの道）…矢田大門から鍛冶屋川の西側を通り、長屋敷の前方へと至る道。開拓道路（現在の県道）でところどころ寸断されています。

